

たま発芽したのをみつけて栽培することになった畑のことである。ルソーはこうした三つのことに言及することによって人間の生活にはまず衣食住の三つの要求を最低限満たす必要のあることを示そうとしていることはあきらかであるが、しかしロビンソンの生活が同時に明らかにしているようにたった一人でそうした必要を満たすことは通常はほとんど不可能にちかい。現実の生活においてはことな産業技術がそれぞれたがいに異なった人々によって、しかもそれぞれの分野でさらに細分化される形で分担されているゆえんである。すなわち一つは農業のために必要な技術であり、もう一つは冶金、そして第三番目は建築の技術である。そしてこれらのなかでも一番重要なのが農業であり、ついで冶金、建築の順になるとルソーはいう⁴⁹⁾。いうまでもなく農業はわれわれに穀物をもたらしてくれる植物の栽培をはじめ肉や毛皮をもたらしてくれる動物の飼養などがそのおもな仕事である。そしてそうした農業に必要な道具を提供するのが冶金技術であり、ついでこれがわれわれの第三番目の要求である住まいの確保にさいしても大いにその力を発揮することになるのだ。ロビンソンにならってエミールはこの時期教師とともに人間に必要なすべての技術をひとつとおりに経験することになるのであるが、かれが生きていくのはロビンソンのように自然のなかではなく人間社会の分業組織のなかにおいてである以上、そうした組織の仕組みをまず理解しておかなければならないし、またみずからの天分に見合った仕事はなになのかをまえもって見定めておかなければならない。ルソーは「まず、人間をたがいに必要なものにしていく産業と機械的な技術にあらゆる注意を集中させるがいい。仕事場から仕事場へと連れてあるきながら、どんなことでも自分で仕事をせずただ見学するようなことはけっしてさせてはならない。そして、仕事場で行われているすべてのこと、あるいはとにかく、そこで見たすべてのことの理由を完全に知ったうえでなければそこから出てくるようなことはけっしてさせてはならない。そのためには、あなたがた自身が働いて、

あらゆるところで手本を示してやるがいい。かれを親方に仕立てあげるために、いたるところで弟子になるがいい。そして、一時間の労働は一日の説明を聞いてかれが覚えるよりも多くのことをかれに教えると考えていい⁵⁰⁾」などと実地体験の重要性を指摘したうえ、こうした体験がおのずから子どもに天分を自覚させるにいたる点にふれてつぎのように述べている。「こういうふうには、知る必要があるすべてのことをかれの目のまえにくりひろげることによって、わたしたちは、かれの趣味や才能をのぼし、かれの天分 (son génie) がめざしていることにむかって第一歩を踏みださせ、そして自然を助けるためにひらいてやらなければならない道をわたしたちに示してくれるような状態に子どもをおくことになる。

こういう限られてはいるが正確な知識の連鎖からもたらされるもう一つの利益は、知識をそのつながりにおいて、その関連において子どもに示し、すべてをその正しい位置において子どもに評価させ、多くの人が自分の心がけている才能を重く見て、自分が捨ててしまったことを軽く見るという偏見をふせぐことだ。全体の秩序を十分によく見ている者は、それぞれの部分があるべき位置を知っている。一つの部分を十分によく見ていて、それを根底から知っている者は、学者 (un savant homme) になれるかもしれない。しかし前者は分別のある人 (un homme judicieux) になる。そして、あなたがたもよく覚えているように、わたしたちが獲得しようとしているのは知識 (la science) ではなく、むしろ判断力 (le jugement) なのだ⁵¹⁾ と。

しかし社会の分業体制を理解し、そのなかでのみずからの位置が把握できるようになったとしても、自分がつくる物と他人がつくる別種の物との正しい交換が保証されていなければ十分安心して社会生活をおくることはできないであろう。すなわちこうした交換はつねに対等におこなわれなければならないが、それはじっさいにはなにによって保証されているのであろうか。結論からいえばそれは貨幣ということになるが、つぎのように説

49) Cf. *ibid.*, p. 460

50) *Ibid.*, p. 456

51) *Ibid.*, pp. 465-466